



JSPS London

巻頭特集 今 JSPS London がオモシロイ!

鼎談 「危ない関与」

科学・アート・公衆衛生の出会い

JSPS London INTERVIEW The 絆

京都大学施設部企画課長・

都外川氏に聞く

2分でわかる!

英国の大型研究プロジェクトへの

投資戦略

No.32

JSPS London

# NEWSLETTER

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター 2012年1~4月 ニュースレター

センター長の視点	2	在英日本人研究者会議を開催	11	英国学術調査報告 2分でわかる英国の大型研究	14
巻頭特集 今 JSPS London がオモシロイ!	3	知っているようで知られていない	12	プロジェクトへの投資戦略	
Cancer Research UK シンポジウム	7	「The Queen's Diamond Jubilee」 A to Z		日英ロボティクスワークショップ	17
事業説明会開催 in Ireland	8	加賀・松尾国際協力員 1年間の研修を終え帰国、	13	スタッフ写真館 今月の1枚	18
平松幸三のご存知ですか?	9	後任は安達・熊谷国際協力員		JSPS Programme Information	19
JSPS London INTERVIEW The 絆	10				

## センター長の視点

平松幸三 ロンドン研究連絡センター長



### 大学の国際化に必要な 教員の流動性

大学教員は給料をもらっているという点では俸給生活者であるが、自由業の顔も持って、制度上、裁量労働制が適用され、自費出張や一定の範囲内で兼業が認められるなど、特別な扱いがなされてきた。人事面でも、一部例外はあるものの、本人の応諾なく異動はなされないし、逆に転職も基本的に本人の意思が尊重される。つまり俸給生活者であるにもかかわらず、組織上は「宮仕え」的側面が薄い。ただし、大学の組織運営は、大学、部局等によってかなり異なることをお断りしておく。

大学教員に自由な勤務を認めるのは、それが独創的な仕事をする上に好ましいと考えられているからだろう。その結果、転職するケースも他の職種に比べて多い。しかし日本の大学教員の流動性は、まだ決して高くない、と私は考える。その詳しい理由は他日に期したいが、ここでは給与などの人事制度が、教員の流動性を阻害するようにできていることを指摘したい。

日本の企業では、給与は月給のほかに生活給としてボーナス、年功序列賃金、さらに終身雇用制と内部昇進とが普及している。野口悠紀雄氏（『1940年体制』）によると、これらは1920年代に大企業で導入されていたが、戦時中に官公庁・

私企業を含め、雇用を私的なものではなく国家に対する奉仕として位置づけ、従業員が自由に移動して生産の向上に支障をきたすことを防ぐためとして定着した制度だ。労働者はひとつの企業に閉じ込められていて、転職するということは大企業から中小企業に移ることを意味し、大抵の場合減収になる。

だが、これは企業にかぎらない。国立大学間の転職ならよいが、国立私立間を異動すると、それぞれに退職金を受け取って転職するので、永年勤務者に有利になっている退職金制度のため、最終的に受け取る退職金が、転職しなかった場合に比べ相当に低くなる。ボーナスも同じで、大抵の転職は4月に起こるから、新しい職場では夏には悲しいほど少ないボーナスを受け取ることになる。

新任教員の給与は、たいてい人事課の若い担当係員が被雇用者の経歴から算出する。大学教員の採用は、多くの場合、世間でいう「中途採用」に当たるのに、その査定を経歴のみで行うのは、研究業績で勝負している者に対しては侮辱に等しい。イギリス人が聞いたら卒倒するのではないかと。報酬がいくらになるか知らずに転職するなどというのは、正気の沙汰とは思えないのだが、実は日本では大学教員自身が、転職にあたって俸給に無頓着な傾向にある。補助金を出している政府は、私立大学の教員給料を抑制したりするので、およその相場ができあがっ

ているから、教員としてはむしろ教育・研究条件や大学のネームバリューを重視する傾向があり、教員の転職に当たって報酬が問題になることが少ない。試みに研究者の公募サイト、「研究者人材データベース (jrec-in)」をご覧になるとよい。これはいわば研究者の求人広告だが、給与などの雇用条件が提示されていないのだ。これに驚かないとしたら、「1940年体制」の発想に頭からどっぴりついているからだ。

その一つである年功序列賃金制度があるために、日本の大学教員にとって、給料は研究業績を上げるインセンティブにならず、生涯2度の昇格（准教授と教授）が転職のため以外には、ほとんど知的好奇心とプライドが研究意欲を支えている。意欲がない人にとっては、特に実績を上げなくとも給料は毎年上がるのだから、じっとしていれば損をしない。むしろ動くと思える。譬えて言えば、トーナメント・プロよりレッスン・プロが保護されていて、これが大学における「1940年体制」の負の側面である。

しかしこれは国際的には異様である。この人事制度のもとで外国人教員を支障なく雇用できるだろうか。さる国立大学で外国人教員を採用することになって、候補者に打診したところ、相手は給与その他の雇用条件のオファーを示してくれ、という。まっとうな要求であるが、大学の事務方は、出せない、と言い、破

談になったことがあった。引き抜くときオファーを出すのは当然だが、事務的にはそうっていないのだ。交渉にあたった教員は、ただやみくもに「来てくれ」としか言えなかった、と聞く。おそらくは陰で嘲り笑われたことだろう。同情を禁じ得ない。教員を招聘するとき日本では相手の雇用条件を査定した上で交渉に臨むことができないなどというのは、イギリスの大学人には想像もつかないのではないかと。逆にイギリスでは、いったん給料が決まったら、物価スライドは別として、昇給しないのだから、とうぜん勤め始める時の給料に敏感にならざるを得ない。

最近是一部で年俸制の教員が増えていくし、また研究者も公募で採用する傾向にあつて、大学教員の流動性を高める施策が普及しつつある。もっとういような傾向が伸びてほしいけれど、まだまだ全体の一部に留まっているようである。日本の大学人事は「1940年体制」にガードされて、世界の大学教員人材マーケットからはずれている。ここを改めない限り、大学の国際化には自ずと限度があるだろう。国際化しようと真剣に考えているなら、まず日本人を含めた教員の流動性を高めるべく、大学は人事制度をはじめ、諸制度を改めていく必要がある、と考えるがいかがであろうか。

# 鼎談 「危ない関与」

## 科学・アート・公衆衛生の出会い



2011年11月、マンチェスター大学 Whitworth Art Gallery にて、科学とアートを融合させた企画展「Air Pressure」が開催され、同会場の月間最高入場者を記録し、英メディアも「その映像表現によるインパクトは、学問的な成果に加えてアートとしても見事な作品」と絶賛しました。翌年1月、これに関連した日英シンポジウムを開催。芸術と科学のコラボレーションに長期間にわたった支援がある英国、昨今サイエンスコミュニケーション、アウトリーチの重要性がますます高まっている日本。今回、シンポジウムを企画した JSPS London 平松センター長、英国側仕掛け人 Dr Rupert Cox、Dr Angus Carlyle の3名にお話を伺いました。

**ポリー:** 1月に開催されたシンポジウム The Risky Engagement 「危ない関与」の目的は何だったのでしょうか。

**ルパート:** このシンポジウムの意義は、芸術と科学のコラボレーションを実践するところにあるのですが、マンチェスター大学のギャラリーで「Air Pressure / 気圧」を展示したような協働プロジェクトを行った目的のひとつは、入場者を楽しませる以上の何かを作品を通じて与えること、また日本から来る学者たちと共に関わるがありました。それに JSPS の参加により、プロジェクトがたいへん重要な発展性を示すこととなりました。

**ポリー:** アンガスはいかがですか。

**アンガス:** 補足しますと、シンポジウムのもう1つの目的は、異なる学術的観点を持ってコラボを促進することだったと思います。それは芸術的観点、自然科学的観点、社会科学的観点ですが、「気圧」

展示におけるこれら観点の三角形は、このシンポジウムの構成および日英の参加者の人選の中でも反映されました。

**平松:** JSPS 側から申し上げますと、通常の JSPS 日英シンポジウムはボトムアップ型で行っており、その場合特定の狭いテーマで実施されることになりましたが、今回ロンドン・オフィスが主体的に関与する以上、幅広いテーマで行いたい、と思いました。また、JSPS は芸術そのものを支援しませんが、科学と芸術のコラボを図ったシンポジウムを行いたい、と考えたのは、それによって科学者も新しい観点を獲得するからで、それこそこのシンポジウムを企画した理由なのです。

**ルパート:** ここには興味深い点が2つあると思います。1つは科学を人々に伝えることの重要性です。それは日本よりも英国においてより強く認識されていることで、英国においては、芸術と科学の協働プロジェクトが生み出すものに対し



平松 幸三  
Professor Kozo Hiramatsu

日本学術振興会ロンドン研究連絡センター長。京都大学工学博士、京都大学名誉教授。武庫川女子大学教授、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授等を経て、2010年5月より現職。専門分野は音響環境学。

て、絶えざる関心があります。このプロジェクトの場合は、平松教授の長年の研究のおかげで科学的成果を展示できているわけですが、その中でわれわれは科学を一般の人に伝える責任について高い関心を払ってきました。もう1点興味深いのは学問的な問いでして、われわれ学者が、芸術と科学のコラボを学術的にどう理解するのか、ということです。これはかなり議論を要する問いではありますが、これこそわれわれが集う機会を持つシンポジウムで提起しようとしたものであり、本にまとめようとしたものです。本とシンポジウムとが一体となって、学術的なプロジェクトとなることを目指しています。

**ポリー**：シンポジウムを通じて得られた、科学知を伝えるよい実践例は何だったと思いますか。

**ルパート**：研究者が自らの研究を表現する学術的方法は区々で、それが問題を孕んでいるのかもしれませんが、分野は相

互にかけ離れていても、実際には表現方法が啓発的なこともあり、異分野の統合が危険だ、とは必ずしも感じられませんね。違いがあるからこそ対話が生まれるので、実際そういうことがシンポジウムの最中にも起こりました。われわれはまたこの学問の違いを取り上げ、それを創造的に生かして本を制作しました。本には互いのやり取り、結びつき、緊張、と言っても生産的な緊張ですが、それらが納められています。

**アングス**：ここが面白い点で、それこそ私がシンポジウムで同僚のアーティスト達に言っていたことです。彼らはシンポジウムで人々がほとんど同じ言語を話しながら、それらの言葉を違う学問的観点で用いている、と多くの点で気がついていました。たとえば、チェルノブイリは複数の発表で取り上げられましたが、チェルノブイリで起こったことについて芸術的な観点で述べたものもあれば、科学的な観点から述べたものもありました。これはその題材ゆえに、結城先生<sup>1</sup>が水俣



を語る際に文学作品を分析していたことにもつながります。様々な学問分野間で環境と人間行動と健康との関係を分析する多様な方法について考える好機となった、と思います。

**ルパート**：このことは水俣、福島、成田の問題を話し合うシンポジウムの中から出てきました。そこでは科学者あるいは芸術家として、題材の特性を特定し、そ

れを芸術的な資料として扱うのか、それとも科学的データとして扱うのか、という問題がありました。これはわれわれが成田に関わった時に体験したものです。膨大な量のデータがあり、一般の人々が理解しにくい複雑な計算が含まれているのですが、われわれはそのデータを取り上げ、別種の題材として変化させようと試みました。これがシンポジウムの最中にも起こったことでした。興味深い疑問点は、研究対象や研究結果を一般の人々に対して伝える過程で自分の研究分野の中で変化が起こるのかということですね。私はこれがシンポジウムの最中に際立っていたので、異なる題材、異なる研究方法、異なる可能性、人々への異なる反応の仕方について、その本の中で表したいと思った次第です。

**ポリー**：平松所長、何か付け加えることは？

**平松**：日本の研究者達は、たとえば桑子先生<sup>2</sup>の環境哲学関係の著作は読んでい

<sup>1</sup> 結城正美 金沢大学教授 英文学者、環境文学研究者。水俣病を描いた石牟礼道子の『苦海浄土』およびチェルノブイリを描いた田口ランティを研究する。また汚染言説について考究する。

<sup>2</sup> 桑子敏雄 東京工業大学教授 環境哲学者。人間の環境を空間の履歴の観点からとらえ、二元論的ヒト・モノ図式を批判する。



ルパート・コックス  
Dr Rupert Cox  
The University of Manchester, Lecturer in Visual Anthropology, School of Social Science  
専門分野は文化人類学。

でも、互いにほとんど面識がありませんでした。だからマンチェスターに集ってお互いに非常に触発された、と喜んでおられました。英国側ではどうでしたか。

**アンガス：**英国側では、それまで知っていた人々にも、シンポジウムの当日に新たな関係が生まれました。彼らの作品を異なる観衆に、異なる方法で表現し、それを通じて以前とは違う何かを彼らが発



アンガス・カーライル  
Dr Angus Carlyle, Co-Director  
University of Arts London, Joint Director of Creative Research into Sound Arts Practice  
代表作に Composer of Some Memories of Bamboo, audio CD and booklet (2009年11月)。

見したからで、これは特定から普遍への移行であり、オリジナルなデータをどう理解し、その過程がどう変化するかということと併せて、材料やデータとどう向き合うのかということを考えることです。同様にあのシンポジウムで体験したことは、様々な学問分野に焦点を当て、研究者やアーティストたちがそれぞれの立場でいかに表現するかを再考するように促す作用だったと思いますし、おそらくわれわれ自身も活動を再考することになるでしょう。

**ポリー：**では、日英の研究者の見方は実質的に一致したと思いますか。

**ルパート：**もし相違があったとしても、それは地理的なものではなかったですね。

**アンガス：**そうですね。地理的な隔たりより学問分野の隔たりの方に関心が寄せられていたようです。

**ルパート：**もし相違があったとすれば、それは英国においてこれらのコラボを支援する体制、つまりわれわれが作品を生み出すために協働したように人々を結び

つける体制が、日本においても同様に可能かどうかだと思います。英国ではウェルコム財団の芸術と科学のコラボに対する支援は、長期間かつ重要な貢献を果たしてきました。日本ではこれほどには芸術と科学のコラボが支援されているとは思えないのですが。

**平松：**実際そうですね。このシンポジウムや「気圧」展示は、学術の世界とは違う観点を持った一種の科学コミュニケーションとみなせるでしょうね。

**アンガス：**確かに。それが、シンポジウム開催日の午後、一般の方々も参加したギャラリー・トークがあった時に、その時間が充実した理由だ、と思いますね。

**平松：**ところで、シンポジウムのタイトルにある「関与」が「危険な」と称されたのはなぜですか。

**ルパート：**リスクとは、何ら生産的なコミュニケーションがなく、芸術と科学の2つの見解が分離している状態を指します。平松先生と共にわれわれの目指すアプローチに反応する人々と知り合うイベ

ントを開催できたことは、非常に有意義でした。そうでなければ、このイベントが単に異なる立場の表明に終わり、その間には何も起こらず、一般の人々が排除されるだけで終わったに違いありません。反応が、一般の参加者に対してなされず、ただギャラリー内で芸術家同志でしか起こらないことをリスク、つまり危険と考えています。

**アンガス：**題名の「The Risky Engagement」は、ほかのレベルでも起こりましたね。なぜなら異なる参加者をつないだことの1つは、まさに危機の重要性を悟り、危機感を持って自分の研究におけるリスクを認識して関与したことだからです。それは科学者であるか芸術家であるかを問わず、です。

**ポリー：**では、企画全体から得られた主要な成果は何でしたか。

**アンガス：**私がシンポジウムから得たものに、協働的な、学問の垣根を越えた方法の可能性があります。一方では、例えば、シンポジウムにおいて人々はお互いに真摯に向き合い、学び合い、啓発し合っ





(聞き手)  
ポリィ・ワトソン  
Ms Polly Watson  
JSPS London International Programme Coordinator

た、と率直に思います。その一方、その日受けたより強烈な印象は、真に協働し、敬意をもってこのプロジェクトに参加できたことが本当に幸運だったということです。

**ルパート：**補足しますと、得られたものとして、異種の他人の認識があります。異なる観衆と言う点では、「気圧」展示とJSPSシンポジウムは別のものでした。本もそうですし、異なる形態が異なる人々に異なる作用を与えます。異種学問領域間で仕事することは、異なる多くの人々をまたぐ形態を創造する可能性があることを意味します。コラボにより、これらの仕事を結ぶ方法がずっと確かなものになってきた、と私には思えます。

**ポリィ：**平松所長、どう思いますか。

**平松：**そうですね、日本からの参加者は皆さん広い見識を持っていますが、芸術家と、特に外国の芸術家とコラボする機会ほとんどないでしょう。ですから彼

らにとって、このシンポジウムは大変刺激的で、印象的な経験だった、と思いますし、実際皆さんそう語っていました。たとえば社会学の船橋教授<sup>iii</sup>は、すこぶる広い視野をお持ちでいながら、これまで聴覚研究者とコラボされた経験はなかったから、これはまたとない刺激的な体験だったな、と思っています。

**アンガス：**このプロジェクトに参画して平松先生のビジョンに沿って一緒に仕事をする経験をしたことは、将来、たとえ自分一人で仕事するとしても、自分が関わるプロジェクトに対する関わり方を劇的に変えた、と思っています。しかし、われわれは今後別な場所で、再び一緒に仕事をする可能性があるのも、とても前向きですね。

**平松：**私の見解としては、これはJSPS Londonがシンポジウムを企画した最初の事例で、それも所長が自分の研究を基にしたのは、とりわけ特別なことでした。研究者が所長を務めているから可能なこ



とで、このシンポジウムの一つの意義と申し上げてもよいかもしれません。

**ポリィ：**そうですね。今日はありがとうございます。ありがとうございました。

※冒頭で紹介しました科学とアートを融合させた企画展“Art Pressure”については、[JSPS London Newsletter No.31](#) P8に企画展開催の記事が掲載されています。ご覧ください。

<sup>iii</sup> 船橋晴俊 法政大学社会学部教授 新幹線公害、水俣病問題を社会学者として研究し、福島原発事故の問題を調査。環境問題を受苦の視点からとらえてきた。

## Cancer Research UK シンポジウム



招待講演者と CRUK Lecture Theatre にて

2012年2月9～10日、Cancer Research UK, Cambridge Research Institute において日英共催シンポジウム “Interdisciplinary approaches for the study of senescence” (英国側オーガナイザー：成田匡史博士、日本側コーディネーター：近藤亨教授 (愛媛大学)) が開催された。当シンポジウムは、JSPS London が実施する日英シンポジウム開催スキームで採択されたもの。老化研究に関して日英双方の研究者が多方面からアプローチを行うことによって、当該研究を進展させることが目的とされた。ロンドンセンターからは、平松センター長他3名が出席した。

シンポジウムは大きく2つのパートに分かれ、1日目(2月9日)には、成田博士による開会挨拶の後、平松所長が挨拶を行った。その後、日英双方からのスピーカーによる講演セッションが終日行われた。日本からは三浦正幸教授(東京大学)、木村宏准教授(大阪大学)、久郷裕之准教授(鳥取大学)、沖田圭介講師(京都大学 iPS 細胞研究所)が講演者として招待され、英国側からは Professor Peter D. Adams (Beatson Institute for Cancer Research)、Professor Nicol Keith (University of Glasgow)、Dr Gordon Peters (Cancer Research UK, London Research Institute)、Dr Jesus Gil (MRC

Clinical Sciences Centre) らがプレゼンテーションを行い、大学の枠を超えた日英研究者の交流の場となった。

また、昼食後には、当該分野において世界的に著名な Professor David Beach、Barts and the London School of Medicine and Dentistry による基調講演があり、“Towards cellular rejuvenation” のタイトルで講演がなされた。本シンポジウムには133名もの出席登録があり(当日の参加者は約100名)、関心の高さが窺えた。

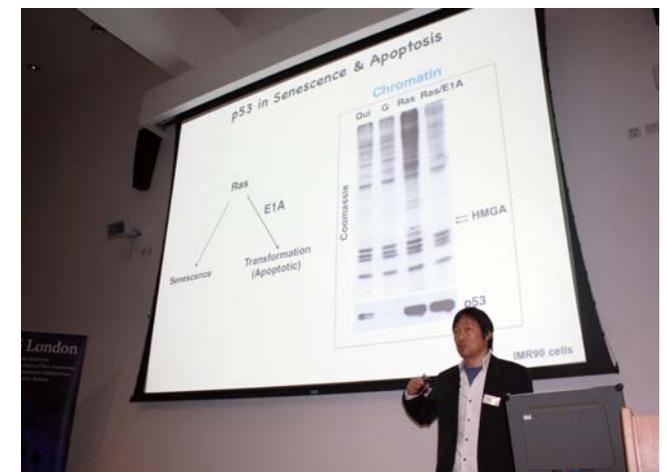
講演終了後には、JSPS 事業のプロモーションを行う場が設けられ、JSPS 英国同窓会会員である Professor Brian C. J. Moore、Department of Experimental Psychology, University of Cambridge が日本での研究生活について語った。

シンポジウムディナーでは、Professor Sir Bruce Ponder、Director of Cambridge Research Institute がホストを務め、Jesus College の歴史と威厳を感じさせる会場の中、参加者は和やかな雰囲気の中で語らい交流を深めた。

2日目(2月10日)は、日本からのスピーカーが各自 Cambridge Research Institute 内の研究室を訪問し、グループリーダーやポストドク、研究室の学生らとディスカッションを行った。日本から訪英したスピーカーにとっては、Cambridge Research Institute がどのように運営され、研究施設がどのように研究活動に利用されているかを知る貴重な機会となった。

本シンポジウムは、全体を通して出席した参加者にとって将来の共同研究ネットワークを構築させる上で重要な場となり、当該研究分野における今後のさらなる発展が期待される。

(松尾)



英国側オーガナイザー成田匡史博士による講演

## 事業説明会開催 in Ireland

20世紀を代表する小説「ユリシーズ」の著者ジェイムズ・ジョイス、ケルト音楽をベースに重厚な世界観で独自の音楽を展開し日本でも人気の高いエンヤ、1756年創業後いまや世界中から愛される黒スタウトを生産するギネス、これらは全て「アイルランド発」であり馴染みが深い。

北アイルランドと合わせても人口は約600万人、面積は約8万5000km<sup>2</sup>（世界で20番目に大きな島）である「アイルランド島」は、人口約550万人で面積が約7万8000km<sup>2</sup>（世界で21番目に大きな島）の北海道と同程度の規模である<sup>1</sup>。



Prof. Anita Maguire (University College Cork 副学長) と

約800万人が住むロンドンと比較すると、人口の上では小さな国ではあるが、その規模にも関わらず、世界の中での存在感やEU加盟国として果たす役割は大きい。

2月26～27日にかけて、アイルランドにてJSPS事業説明会を行った。

今回訪問したGalway及びCorkは、アイルランドの首都Dublinがアイルランド島の東に位置しアイリッシュ海に面しているのに対し、Galwayは島の西端、Corkはケルト海に近い南に位置している。

CorkはアイルランドではDublinに次ぐ第2の都市。1845年に設立<sup>2</sup>されたUniversity College Cork（以下、「UCC」という。）での事業説明会には35名の参加者が訪れた。説明会後には、研究・イノベーション担当副学長であるProfessor Anita Maguireと面会した。Professor Maguireは、アイルランドのリサーチ・カウンシルであるIRCSET<sup>3</sup>のChairでもあり、アイルランドにおける研究費予算の

現況や海外研究機関との連携、JSPS事業によるアイルランドとの研究交流などについて意見交換を行った。

UCCがQueen's Collegesを源流にするのと同じく<sup>4</sup>、National University of Ireland、Galway（以下、「NUI Galway」という。）もその1つとして設立された。事業説明会のアレンジを行ったNUI Galwayの国際交流担当者や、JSPS事業元フェローで日本での研究経験を語ったDr Ciaran Morrisonからは、JSPS事業による両国学術機関のさらなる研究交流・国際交流支援に対する熱い期待が寄せられた。

3月1～2日には、イングランド中部に位置するUniversity of Leicester及びKeele Universityを訪問した。Keele Universityでの説明会終了後には、研究担当副学長であるProfessor Mark Ormerodによるキャンパスツアーが行われた。

英国内の大学には、学生自身が運営し、豊かなキャンパスライフを送るための様々な物（生活用品、文具、スポーツ用品、アパレル）や場所（美容室、フィットネスクラブ、バー、コンサートホール）を提供する「学生会館」が存在する<sup>5</sup>。Keele Universityキャンパス内には学部生向けと大学院生向けがあり、キャン



Keele大学キャンパスにて

パスツアーの際にはちょうど新しい学生会館を建設中であった。キャンパスは、広く延びた美しい湖と背の高い樹木、緑豊かな草原や豪奢で格式のある庭園を有し、ロンドン市内にある数多くの有名な公園とも見劣りしない程の、格好の散歩コースがそこにはあった。

英国内の大学キャンパスは教職員及び学生にとって働く場、勉学に勤しむ場としてだけではなく、生活の場として寛くことのできる優れた環境や異分野の人との交流の場として機能しており、このようなキャンパスに身を置いて暮らす人々のことを羨ましく感じた。

(松尾)

<sup>1</sup> 林景一（現・駐英国特命全権大使）『アイルランドを知れば日本がわかる』（角川書店、2010年）を参考にした。

<sup>2</sup> アイルランドに3大学設立されたQueen's Collegesのうちの1つ。授業開始は1849年11月から。

<sup>3</sup> Irish Research Council for Science, Engineering & Technology (<http://www.ircset.ie/>)

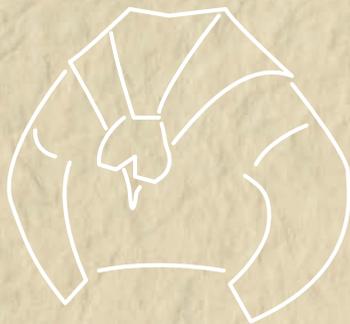
<sup>4</sup> Queen's Colleges 3大学のうち、残りの1つはQueen's University Belfast。

<sup>5</sup> JSPS London Newsletter No. 27 平松センター長コラム「大学の交流施設」で詳しく紹介している。

## 女子生徒は なぜセーラー服を着るのか？



## 平松幸三の ご存知ですか？



セーラー服は、言うまでもなく水兵の軍服である。心根はボパイのようにやさしいかもしれないが、むくつけき刺青男たちが着るものだ。それが女子中高生の制服の定番になっているのを不思議に思われたことがあるだろうか？そのいきさつはこうである。セーラー服が一般に流行したのは、英国海軍水兵の軍服がビクトリア女王のお気に召して、王子に着せられたことに由来する、というのが通説である。アルバート・エドワード皇太子がセーラー服を着用した絵が残っているが、実に愛らしい。これをきっかけに、19世紀の英国でまず男の子の服として流行し、その後女の子、さらには成人女性のファッションとして欧米で流行した。セーラー服は、欧州大戦中ココ・シャネルがセーラー服様のデザインを発表したほどに、なによりカッコいい。それに活動的で実用的とくるから、戦時中銃後を守ってさまざまな仕事に就いたとき動きやすい服を

着た女性たちにうけ — 窮屈なコルセットよ、さようなら —、欧米で1930年ごろまで流行した。日本ではミッション系女学校で米人女性教師の提案により制服として採用されるようになるのが、1920年代。平安女学院や福岡女学院がその嚆矢とされる。それまでの女学校の制服は和服改良型とでも呼ぶもので、現在大学の卒業式などで多くの女子学生が着用するあれである。欧州大戦後、わが国で生活改善運動などが起こり、かつ西洋の文物が受け入れられ始めた大正時代になって、洋風の制服を着ても非難されなくなった世相もあつたろう。女子生徒の制服も洋風に変えたい、という機運にあつたときたまたま欧米で流行していたセーラー服が採用され、女性ファッションとしては消えた後も、女子生徒の制服としてすっかり定着してしまった。150年前の英国女王のお好みが、まわりまわって今も日本に根付いているという次第である。

## JSPS London INTERVIEW

The  
絆  
kizuna

【略歴】  
都外川 一幸  
(とどがわ かずゆき)  
2000年文部科学省大臣官房  
文教施設部。2002年科学技  
術・学術政策局。2005年  
JSPS London 副センター長。  
以後文科省大臣官房文教施設  
企画部を経て、2011年より  
京都大学勤務。

伝えるべきものは形あるものだけではありません。我々が獲得した知識や経験、そして思いもまた次の世代に伝えてゆかなければならないものです。先輩たちへのインタビューを通して、ロンドンセンターの過去・現在・未来へと続く「絆」を手繰り寄せます。

第四回は、6代副センター長、現京都大学施設部企画課長の都外川一幸氏に  
お越しいただきました。

聞き手 齋藤 (副センター長)、加賀 (国際協力員)

## — JSPS London 赴任はどうでしたか。

楽なものではなかったです。在任後半の1年間で、業務の半分はオフィス移転でした。ロンドンのオフィス家賃は圧倒的に世界1位だったなか、オフィス契約最終年の10年目がかつバブルでレントの大幅な上昇は明らかだったので、まず物件探しから始めました。当時小野理事長がアカデミックな地域が  
いいとおっしゃっていたので、ロンド

ン大学から場所を借りることも検討しましたし、民間の物件34件を紹介してもらい実際に18件見てまわりました。それでも条件が合うものに巡り合えず、最後の最後に今のオフィスに辿り着きました。次に予算の問題で頭を悩ませました。改修工事の見積もりを14社に依頼し、移転費用を不動産会社が想定した最低額よりも低く抑えたものの、本部からはさらに2/3に抑えるように指示されました。予算の問題を解決

しないまま4月を迎え、所員はみな帰国し、僕とナタリー(当時のローカルスタッフ)だけが旧オフィスに残されました。もともと6月中旬には契約締結できる予定でしたが、先方の不動産屋、弁護士の交代もあって、移転交渉も長引きました。建物は築100年以上で何が起こるかわからないのでサービスチャージにどこまでのキャップをつけられるかが争点でした。この弁護士同士の交渉はかなりの持久戦になったのですが、「クローズしてくれ」と何度言ってもしない英国人弁護士に電話口で怒鳴りつけてしまったとき、ナタリーが「これでも飲んで落ち着いて」と紅茶を入れてくれたことを今でも覚えています。その後も、任期である9月末までに移転完了できるよう取り組んでいましたが、改修工事を開始するための弁護士間の交渉決裂や、工事の現地業者の対応の遅さにより、一時は無理だと思いました。最終的には内装工事に関わるいろいろな人が頑張る間に合わせていただき、送別会で「都外川が一生懸命やるから、僕らもなんとかしてやろうと思った。」と言っていたときには、本当に感謝しました。英国では、こうしたオフィス移転はほとんどがスケジュール通りに進まないそうです。僕の社会人経験の中で「も  
うできない」と思ったのは、移転費用が相当に足りなかったこのときだけか

もしれません(結局本部は予算を出してくれ、大変感謝しています)。あの経験に比べれば、どんな仕事でもなんとかなる、という自信のようなものになっています。

## — この赴任がご自身の今後にどのような影響を及ぼしましたか。

英国では政府も大学も、はっきりとした目的をもって戦略的に動いていると感じました。そして個々人の責任で仕事を進めているところは、日本のビジネスカルチャーと違うとはいえ自分の中に取り入れていきたいと思っています。今の部下の方々が聞いたら、できてないじゃないかと言われちゃいそうですが(笑)。それと、日英の研究環境を比較し、英国では研究に専念できる環境があるという声を日本人研究者会議のネットワークで聞くことができたのは勉強になりました。私がロンドンセンターにいた頃、JSPS London ニュースレターNo. 08(2006年1~3月分)に掲載させていただいた、MRC分子生物学研究所の長井潔先生の「日本の科学研究の将来について」という文書は素晴らしいです。

ロンドンセンターは、私がいた頃の活動も継続されつつ、いろいろな方の協力の下で発展していてすごく嬉しいです。応援しています!

## 在英日本人研究者会議を開催



在英日本人研究者会議参加者全員と

2012年2月24日、JSPS London レクチャーホールにて在英日本人研究者会議が開催された。当会議は大学その他の公的研究機関で研究に従事されている在英の日本人研究者を対象としたネットワークづくりと、当センターとの協力や意見交換等を行う機会として2005年度から始まり今回が7回目である。

事前に57名の在英日本人研究者出席登録があり、当日は54名の出席があった。会議は、平松センター長挨拶にはじまり、研究者各自からの自己紹介を行った。次いで、在英国日本国大使館 奥一等書記官から日英の科学技術協力に関する行政体制、基本戦略及び外交について、JSTパリ事務所荒川所長からJSTの活動概要について、JSPS London 齋藤副センター長からJSPS Londonの活動についての

プレゼンがあった。

パブリックレクチャーでは、KING'S College LONDON Dr PatalanoからRising to the Challenge – Mobilising the Self-Defence Force for Disaster Relief – を、在英国日本国大使館防衛駐在官1等海佐南様から自衛隊と災害等対応 – 大規模・特殊災害への対応と国際緊急援助活動の視点から – というタイトルで講演頂いた。続いてネットワークレセプションがあり、オックスフォード大学永瀬秀明教授からの乾杯の挨拶で始まり、英国で活躍される異分野の研究者の交流の場となった。

レセプションやその後のフィードバックで聞かせ頂いた意見・要望など、この会が今後も在英日本人研究者にとって有意義な場になるよう次の企画に活かしたい。

(齋藤)

## \* 参加者からのコメント \*

- 異なる専門分野に目を広げることの大切さを改めて認識しました。自分の研究とは一見無縁のように思われた講演テーマが通底する課題を有していることを知り、大いに触発されました。  
(Loughborough University 小田 光宏)
- 東北大震災は関心のあるトピックなので興味深く拝聴できました。  
(University College London ケーブル 典子)
- 各学問分野で活躍されている研究者の方々にお目にかかる機会をいただき、有意義な時間を過ごすことができました。  
(University of Nottingham 廣野 美和)
- スコットランドに滞在しており、日ごろ日本人の研究者と交流する機会もありませんでしたので、貴重な機会を提供していただきました。  
(University of Glasgow 上田 健介)



レセプションの様子

## 知っているようで知られていない、「The Queen's Diamond Jubilee」 A to Z



エリザベス女王とフィリップ殿下

英国の君主であるエリザベス女王（86歳）が、2012年2月、即位から60周年を迎えました。これを記念して、5月10日から13日にかけてウィンザー城でパレードを実施、6月には4日間に渡る壮大な祝賀行事「ダイヤモンド・ジュビリー」が予定されています。

### — 4日間を通してのビッグイベント

昨年のウィリアム王子とキャサリン妃

の結婚式は、日本でも話題となりましたが、今年は6月2日～5日に祝賀行事「ダイヤモンド・ジュビリー」が開催されます。既に5月には、ロンドン近郊のウィンザー城にて550蹄以上の馬、18ヶ国からの1000名以上の演者による“The World Comes to Windsor Pageant”というパレードが実施され、6月の祝賀行事では、千隻ほどの船がテムズ川を航行、バッキンガム宮殿でのコンサート、セントポール寺院における礼拝など多数のイベントが予定されています。

### — 親しみやすい女王

エリザベスは、1952年、映画「英国王のスピーチ」で知られる父ジョージ6世が死去したことに伴い女王に即位しました。現在は、ビクトリア女王（在位1837～1901年）に次ぐ在位期間となっており、英国史上最高齢の君主です。86歳の誕生日を迎えましたが、ダイヤモンド・ジュビリーツアーでは女王自ら各地を訪問、5月18日には、ウィンザー城で天皇・皇后両陛下をはじめ、20ヶ国以上の現及び前君主をインフォーマルなランチ会に招くなど精力的に動かれています。「ダイヤモンド・ジュビリー」の公式サイト<sup>1</sup>に使用されているエンブレムに

は、6～14歳の子供向けにデザインの募集が行われ、10歳の女の子のデザインが採用されています。同サイトには、子供でも60年にわたる統治が理解できるクイズ形式のページもあり、こうしたことから国民に親しみやすい女王と言えます。

### — 「ダイヤモンド・ジュビリー」と コモンウェルス

「ダイヤモンド・ジュビリー」では、4日間で様々なイベントが行われます。ビクトリア女王在位60周年にもダイヤモンド・ジュビリーのお祝いをしている前例もあり、また、西洋では、60周年の祝いにダイヤモンドを贈る風習もありますが、現政権下では2010年より4年間の財政再建を進められている中、盛大にお祝いするのはなぜでしょうか。

ここでエリザベス女王のメッセージに注目してみます。「(前略)この特別な年に、私はあらためてあなた方にこの身を捧げるが、この機に結束することによる力と、家族の絆や友情や良好な隣人関係がもたらす強さとに対して今一度思い致すことを希望する。幸運にもこれまでそういった実例を目にしてきたし、私たち

家族一同は英国内とコモンウェルス諸国を訪問した際に様々な形でお目にかかることを願っている。(後略)<sup>2</sup>とあります。コモンウェルスは、1931年にウェストミンスター



ダイヤモンド・ジュビリー エンブレム

憲章において、英国国王に対する共通の忠誠によって結ばれた、各々が主権をもつ対等な独立国家の自由な連合体として発足したものです。2011年の英連邦首脳会議では今回の祝賀行事の検討が行われるなど、多数の国家が関わった壮大なイベントとなっています。一方で、女王からは“The use of public funds should be minimised, and people should not “be forced to celebrate.”<sup>3</sup>とのお言葉もあり、財政事情や国民に細やかな配慮が伺えます。「ダイヤモンド・ジュビリー」では60周年のお祝いに加え、壮大なネットワーク、コモンウェルスと女王のリーダーシップを随所に感じ取ることができるのでは、と思います。

(熊谷)

<sup>2</sup> <http://www.royal.gov.uk/LatestNewsandDiary/Pressreleases/2012/TheQueensDiamondJubileemessage.aspx> より著者訳

<sup>3</sup> Diamond Jubilee of Elizabeth II [http://en.wikipedia.org/wiki/Diamond\\_Jubilee\\_of\\_Elizabeth\\_II](http://en.wikipedia.org/wiki/Diamond_Jubilee_of_Elizabeth_II)

<sup>1</sup> 「ダイヤモンド・ジュビリー」公式サイト <http://www.thediamondjubilee.org/>

## 加賀・松尾国際協力員 1年間の研修を終え帰国、後任は安達・熊谷国際協力員

2012年3月28日、ロンドンセンターで1年間のJSPS国際学術交流研修を終了した加賀涼子、松尾勇太国際協力員が帰国した。現在は、各々大阪大学、九州大学で勤務している。後任には安達大祐（大阪大学）、熊谷純一（熊本大学）国際協力員が着任した。

以下、帰国職員・新任職員からのコメントを紹介する。

### 【帰任のごあいさつ】

ロンドンでの1年は、人生5年分の経験をしたと言っても過言でないぐらい、密度の濃い日々の連続でした。滞在中は事務所内のあらゆる業務に携わり、多くの人との出会いがあり、大学訪問では英国内を北から南に縦断することも。特に海外での広報に携わったことは、自分にとって大きな転機となるぐらい、とても貴重な経験です。

帰国後は大阪大学広報・社会学連携オフィスに配属され、学内広報誌の編集やプレス対応を担当しています。広報業務に携わりたいと思うきっかけをくれたの



松尾国際協力員（左）、加賀国際協力員（右）

は、JSPS Londonでの経験があったから。この1年で培った経験を活かして、日本の大学のプレゼンスをより高めていくような仕事をしていきたいです。（加賀）

JSPS Londonでは主に会計と経理関係を担当しましたが、その他にニュースレターの記事執筆やセンター主催セミナーの運営、事業説明会の準備・運営・プレゼンテーション、シンポジウム出席にかかる準備等、幅広い業務に携わることができました。

日々の業務を通じ、日英間の経理方法等に対する認識のズレを感じることもありましたが、考え方の異なる相手に対してどのように自分の意思を伝えやり取りを行っていくかの術を僅かなりとも身につけることができたように思います。

海外実務研修報告書では、「英国におけるリサーチ・マネジメント体制」をテーマに報告書を作成しました。外部研究資金の獲得が大学運営を左右するようになった昨今、大学戦略として、研究活動の資金調達から運営までを総合的にマネジメントするスタッフ整備の必要性を痛切に感じました。

最後に、英国での慣れない仕事と生活の中で、励まし支えてくださったJSPS Londonの皆様と、このような貴重な機会を与えてくださり2年間ご支援くださったJSPS本部や九州大学の皆様に心から感謝申し上げます。（松尾）

### 【赴任のごあいさつ】



安達国際協力員

偶然にも3年連続で大阪大学職員がロンドンセンターで総務担当となりました。2004年に大阪大学に採用され、医学科、保健学科、微生物研究所（実際にはタイ王国内の共同研究センター）、理学部、日本学術振興会国際事業部勤務で、阪大勤務時は全て教務という経歴です。JSPS Londonでは総務を担当しており、経理以外が範疇と幅広い仕事を担当させていただいております。ロンドン勤務と

いう貴重な機会をいただいたので、実りの多い赴任とし帰任後に繋げれば、と思います。（安達）

日本学術振興会東京本部では国際事業部地域交流課でアジア関連の会議運営を担当していました。熊本大学では、大学病院で研修医担当の仕事をしていました。JSPS Londonでは、主に会計業務とニュースレターを始めとした広報業務を担当いたします。会計業務では正確・スピーディーに、ニュースレターでは学術情報の提供、センターの活動紹介等をわかりやすく発信することを心がけたいと思います。貴重な海外勤務を1日として無駄にすることなく帰国後に生かせるよう、多くのことを持ち帰りたいと思います。（熊谷）



熊谷国際協力員

## 2分でわかる！英国の大型研究プロジェクトへの投資戦略【1/4】

## Point

- ・年間£1億規模の大型研究施設投資をロードマップに基づいて戦略的に実施
- ・策定中の新ロードマップでは研究施設の優先順位を明示予定

## Introduction

英国は、Diamond<sup>1</sup> や ISIS<sup>2</sup> といった大規模かつ世界最先端の研究施設を多数有しており、世界の科学を先導する画期的な成果を挙げてきた。また、これらの研究施設は、広く国内外の研究者にも開放されており、世界の研究水準の向上にも大きく貢献している。加えて、英国は、LHC<sup>3</sup> や ALMA<sup>4</sup> をはじめとする国際共同プロジェクトにも積極的に参画しており、国際舞台におけるリーダーシップも存分に発揮している。

英国では、このような大型の施設を必要とする研究プロジェクトを戦略的かつ計画的に推進するため、ロードマップが策定され、政策実施のための基礎資料として活用されてきた。ロードマップは、プロジェクト間の優先度や具体的な工程などを明記しておらず、可能性を広く捉えた概念的なレポートとなっており、将来的な予算措置を保証するものではないが、科学的な検証に基づいた重要な政策文書として位置付けられている。現在、予算などの政策的な背景を踏まえて、2012年秋頃を目途に、新たなロード

マップの策定に向けた取組が進められている。

一方、日本においても同様の動きが見られ、2010年9月、文部科学省の審議会が、学術研究の大型プロジェクトに関するロードマップを策定<sup>5</sup>した。これは、日本では初めてとなる試みであったが、この取組によって各分野の研究者コミュニティにおける議論が活性化するとともに、ロードマップに掲載された一部のプロジェクトの予算措置が実現するなど、その政策的意義は着実に高まりつつあると言える。当該ロードマップは、研究者コミュニティにおける検討を踏まえて定期的に改訂を行っていくことが予定されており、現在、一回目の改定に向けた作業が進められている。

大型研究プロジェクトは、巨額の公的投資を要するため、社会や国民の幅広い理解を得ながら長期的展望を持って計画的に推進していくことが重要である。その規模が大きくなるほど、国際的な連携の可能性も視野に入れた企画・立案が必要となってくることから、このような取組は、今後ますます重要になっていくと考えられる。

本報告においては、英国における現行ロードマップの概要と、新たなロードマップ策定に向けた動向に関する要点を紹介したい。

## 1. 現行ロードマップ “Large Facilities Roadmap 2010”

## (1) 背景

世界最先端の研究施設を整備し、広く国内外の研究者に開放することは科学の進展にとって欠かせないが、技術の進展などによって施設そのものが複雑化し、より巨額の費用を必要とするようになってきた。また、取り扱う研究課題も、気候変動や素粒子物理学のように地球規模の挑戦であったり国際協力を前提とした

スケールの大きいものになりつつある。そのような研究施設に対する公的投資を戦略的に行うため、7つの研究会議<sup>6</sup>の代表的組織である RCUK<sup>7</sup> が、2001年6月、大型研究施設に関するロードマップを策定した。以来、2005年、2008年、2010年と三度にわたるアップデートを行い、現在は、2010年7月に改訂された “Large Facilities Roadmap 2010”<sup>8</sup> が最新のロードマップとして様々な場面で活用されている。

ロードマップは、英国の研究者が望む研究施設全てを網羅しているものではなく、RCUKとしての戦略的な重要性と巨額の投資に相応しい価値が認められた施設に限定されている。ロードマップに掲載された研究施設は、次の要件を満たすものとして、

<sup>1</sup> オックスフォードに位置する放射光施設であり、創業の可能性を持ったタンパク質研究をはじめとする物質構造科学研究に利用されている <<http://www.diamond.ac.uk/>>

<sup>2</sup> オックスフォードに位置する中性子ビーム施設であり、加速器で作られる中性子やミュオンを用いて物理学、化学、物質科学などの研究が実施されている <<http://www.isis.stfc.ac.uk/>>

<sup>3</sup> スイスとフランスの国境をまたぐ世界最大の大型ハドロン衝突型加速器であり、英国の他にドイツ、フランスなど欧州各国の協力体制のもと、宇宙創成の謎や物質の究極の内部構造などに迫る素粒子実験が実施されている <<http://lhc.web.cern.ch/lhc/>>

<sup>4</sup> チリのアタカマ砂漠に建設中の巨大電波望遠鏡であり、英国を含む欧州、北米、東アジア諸国の国際共同体制のもと、66台のパラボラアンテナを設置し、一つの超高性能な電波望遠鏡として宇宙創世記の銀河や原始惑星などの観察を目指す計画 <<http://www.almaobservatory.org/>>

<sup>5</sup> 学術研究の大型プロジェクトの推進について（審議のまとめ） <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingijiyutu/gijiyutu4/toushin/1298714.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingijiyutu/gijiyutu4/toushin/1298714.htm)>

<sup>6</sup> Research Council（研究会議）：英国の基礎研究に関する主要なファンディングエージェンシーであり、実際に研究を行う研究機関でもある執行型非省庁公共機関

<sup>7</sup> Research Councils UK（英国研究会議）：7つの研究会議が共同で2002年に設立した組織であり、それぞれの研究会議が連携することで、研究会議全体の研究力やイノベーション力、社会への影響力などを効果的・効率的に高めることを目的としている

<sup>8</sup> Large Facilities Roadmap 2010 <<http://www.rcuk.ac.uk/Publications/policy/Pages/lfr.aspx>>

2分でわかる！英国の大型研究プロジェクトへの投資戦略【2/4】

個々の研究会議からの推薦に基づいてリストアップされたものである。

- 研究会議の任務・戦略に照らして重要な施設
- 研究者コミュニティや他の研究会議などからのニーズが高い施設
- 設計や立地、コストなどについて専門家からの適切な評価を経た施設
- 幅広い国際性を有しており、他国との協力の可能性が認められる施設

なお、“Large Facilities Roadmap 2010”は、その策定に先立って、2009年夏から意見募集が行われ、幅広いステークホルダーの意見も反映されたものとなっている。

(2) 財政措置

ロードマップに掲載された大型研究施設に対しては、政府機関や地方公共団体、チャリティ団体、産業界、欧州委員会をはじめとする国際機関などからの支援が考えられるが、最も主要な公的投資としては、BIS<sup>9</sup>を通じて配分される“Large Facilities Capital Fund”が挙げられる。本資金は、大型研究施設の新設や既存施設の拡張、高度化など、RCUKとしての投資を支援する経費として設立されたもので、各研究会議の予算とは別枠で、年

間£1億規模の予算が配分されている。プロジェクトが本資金による支援対象となるためには、基本的に以下の基準を満たすことが求められている。

- ロードマップに掲載されていること
- 総建設費用が£2,500万以上、もしくはプロジェクトを主導する研究会議における年間予算の10%以上に相当すること
- 複数の研究会議からの支持を得ていること
- プロジェクトを主導する研究会議からの資金投資を受けること
- 運用費の獲得方針が明確であること

上記より、ロードマップへの掲載は、ただちに予算措置が保証されるものではないものの、当該資金獲得の必要条件を満たすことになるため、プロジェクトの実現に向けた期待値を高めることとなる。

また、RCUK及び各研究会議は、次の三段階のプロセスによってロードマップ掲載から当該資金への提案に至る優先順位付けを実施している。

- ① 各研究会議が、それぞれの研究者コミュニティにおける要望に配慮して、ロードマップに盛り込む施設を決定
- ② “Large Facilities Capital Fund”による支援に相応しい候補施設を絞り込み

- ③【表1】の基準に基づいて優先順位付けを実施
- ※②、③における絞り込み及び優先順位

付けは、それぞれの研究会議で実施された後、最終的にRCUKにおいて包括的な承認を得る。

【表1】優先順位付け基準

インパクト	イノベーション - プロジェクトから導かれる知識の重要性 (当該研究領域に飛躍的な進歩をもたらす可能性が認められるか)
	利益の規模と範囲 - 研究基盤より得られる利益の広がり
	戦略的要素 - 当該研究領域において英国が有する国際競争力 - 出資者にとって優先度が明白か - 投資の有無が当該研究領域における英国のポジションに影響を与えるか
	社会的・経済的インパクト - 当該研究の進展による英国の社会・経済への波及効果が認められるか
リスク及びコスト	費用対効果及びコストに見合った利益を導く手法
	技術的リスクの水準及びリスク回避の手法

このようにして優先順位を付与された研究施設のリストは、政府に対するアドバイスの形で供され、限りある資金の配分にあたっての重要な参考意見として活用されることとなる。

(3) ロードマップの概要

“Large Facilities Roadmap 2010”には、全7分野53の大型研究プロジェクトが掲載されており、それぞれの局面に

応じて以下の三カテゴリーに分類されている。

- 既存 (Current) : 運用中の施設または英国による出資が行われている国際施設
- 更新 (Renewals and Upgrades) : 既存施設の更新または高度化計画
- 新規 (Emerging) : 計画・構想段階にある新規施設

また、ロードマップには、プロジェク

<sup>9</sup> Department of Business Innovation and Skills : ビジネス・イノベーション・技能省

2分でわかる！英国の大型研究プロジェクトへの投資戦略【3/4】

トごとにそれぞれ1ページずつの解説が盛り込まれている。記載されており、プロジェクトの背景やロードマップに掲載されたプロジェクトの実効性、経費や協力体制といった情報がトの一覧を【表2】に示す。

【表2】ロードマップに掲載されたプロジェクト一覧

分野	プロジェクト名	カテゴリー	経費 (€百万)	運用時期
天文学、天体物理学、核・素粒子物理学	European 3rd Generation Gravitational Wave Observatory (Einstein Telescope)	新規	40	After 2016
	European Extremely large Telescope	新規	45	2018
	Facility for Antiproton and Ion Research (FAIR)	新規	10	2017 / 18
	Future High Energy Colliders	新規	350	After 2020
	High Power Laser Energy Research Project (HIPER)	新規	N/A	2020
	Large Hadron Collider	既存	50	2020
	Next Generation Neutron Sources	新規	240	2021, 2023
	Neutrino Factory	新規	N/A	After 2018
	Square Kilometre Array	新規	120	2014 - 2020
	医学・生命科学	Biomedical ESFRI Projects	新規	Over 1,000
European Centre for Systems Biology		新規	50	2014
European Life-Science Infrastructure for Biological Information (ELIXIR)		新規	75	2010 - 2020
Institute for Animal Health – Pirbright		更新	135	2012
Institute for Animal Health – Compton		更新	N/A	2017
Laboratory for Molecular Biology		更新	212	2012
Mary Lyon Centre		既存	18	2006
Research Complex at Harwell		既存	26.4	2010
UK Biobank		既存	93	2010
UK Centre for Medical Research and Innovation (UK CMRI)		更新	626	2015
コンピュータ・データ処理	Provision for High Performance Computing	既存	52 / 12.3	2007 - 2013 / 2010 / 2011
エネルギー	High Power Laser Energy Research Project (HIPER) 【再掲】	更新	N/A	2012
	Mega Amp Spherical Tokamak (MAST)	新規	45	2018
環境科学	Atmospheric Research Aircraft	更新	25	2015
	Antarctic Marine Capabilities	更新	200	2014 - 2020
	Environmental ESFRI Projects	新規	53	2011 - 2015
	Environmental Omics Bioinformatics Facility	新規	30	2016
	Halley Research Station Antarctica	更新	50	2012

分野	プロジェクト名	カテゴリー	経費 (€百万)	運用時期
環境科学	Integrated Rural and Urban Observatories	新規	15 - 20	2014 - 2017
	Oceanographic Research Ship (replacement for RRS Discovery)	更新	75	2014
	Oceanographic Research Ship RRS James Cook	既存	40	2007
	Platforms and Instrumentation	新規	30	2013 - 2018
	Rothera Research Station, Antarctica	更新	35 - 40	2018
	材料科学	Diamond Light Source – phase III	更新	111
European Synchrotron Radiation Facility		既存	28	2018
European X-Ray Free Electron Laser		新規	N/A	2014
Extreme Light Infrastructure		新規	N/A	2016
Gateway Centres at the Daresbury and Harwell		新規	125	N/A
High Power Laser national facility (VULCAN-DIPOLE)		新規	25 / 50	2014 - 2015
Institut Laue-Langevin (ILL)		既存	40	2020
ISIS Target Station 2 – Phases II and III		更新	30 / 35	2012 - 2014 / 2015 - 2017
Laboratory for Molecular Biology 【再掲】		更新	212	2012
Mid-Range Facility Provision		更新	50	2010
社会科学・人文科学	Administrative Data Liaison Service	新規	0.5	N/A
	British Election Study (BES)	既存	1.5	2008 - 2012
	Census of Population Programme	既存	15	2006
	Centre for Longitudinal Studies (CLS)	既存	35	2000
	Council for European Social Science Data Archives (CESSDA)	更新	27	2010
	Economic and Social Data Service (ESDS)	既存	28.6	2003
	English Longitudinal Study of Ageing (ELSA)	既存	16	2003
	European Social Survey (ESS)	更新	3.2	2009
	National Centre for E-Social Science (NCeSS)	既存	16.5	2004
	National Centre for Research Methods (NCRIM)	既存	21	2004
	Secure Data Service (SDS)	新規	2.2	N/A
	Understanding Society – UK Household Longitudinal Study	既存	50	2008 - 2009
2012 Birth Cohort Study and Cohort Resources Facility	新規	33.5	2010	

2分でわかる！英国の大型研究プロジェクトへの投資戦略【4/4】

2. 新ロードマップ “Capital Investment Roadmap” の策定に向けて

2月10日、RCUKは、新たなロードマップ “Capital Investment Roadmap” の策定に向けた意見募集を開始した<sup>10</sup>。これは、2010年10月に政府が発表した包括的歳出見直し “Spending Review 2010”<sup>11</sup> における厳しい財政状況などに対応するための取組であり、新ロードマップは、現行の “Large Facilities Road-

map 2010” に置き換えられることが予定されている。また、新ロードマップでは、これまでのロードマップとは異なり、研究施設投資の優先順位が明示される予定となっている。これには、幅広い予算獲得の機会に備えるとともに、政府と研究者コミュニティ間の認識の共有を図るというRCUKの狙いがある。

本意見募集では、国内の高等教育機関や研究機関、学術関係団体といったステークホルダーに対し、以下二つの設問への回答を求めている。

● 国家の持続的な発展を実現するため、自身の研究領域において、今後10年以内にどのような研究施設への投資が必要であるか（優先度が高いと考えられる研究施設一つを記載し、投資期間や経済・社会への波及効果、英国の研究基盤にとっての重要性、協力体制などの情報を盛り込む）

【以下選択肢】

－ 関係の深い研究会議

－ 既存の研究施設の維持・発展か、研究施設の新設か  
－ 投資総額

● 上記研究プロジェクト実現にあたっての鍵となる挑戦課題

意見募集は5月4日に締め切られ、その結果などを踏まえて、本年秋頃に新たなロードマップが公表される予定となっている。（高橋）

<sup>10</sup> RCUK consultation for a Capital Investment Roadmap

<<http://www.rcuk.ac.uk/media/news/2012news/Pages/120210.aspx>>

<sup>11</sup> Spending Review 2010 <[http://cdn.hm-treasury.gov.uk/sr2010\\_completereport.pdf](http://cdn.hm-treasury.gov.uk/sr2010_completereport.pdf)> :

複数年度予算を採用する英国政府の支出計画であり、2011年から2014年の4年間を対象としている

Recent Activities

日英ロボットクスワークショップ



(左) Dr Robert Leese、(右) Dr Rushen Patel と St Cathrine's Collegeにて

2012年3月22日、University OxfordのSt Catherine's Collegeにて、UK-Japan Robotics Workshopが開催され、平松センター長他2名が出席した。同大学及び技術移転ネットワーク（英国政府技術戦略委員会の管轄）が主催した同ワークショップは、2011年10月の駐日英国大使館によるサービスロボット視察団派遣と研究会開催のフォローアップとして企画されたものである。

会場には、日英の大学・研究機関ある

いは企業のロボット工学研究者約25名が参加。人の体をバランス良く抱き上げる介護ロボット、器用な指先を持つ手のロボット、突如出現する障害物への接触を避けて移動するロボットなど、様々な最新研究成果が紹介された。

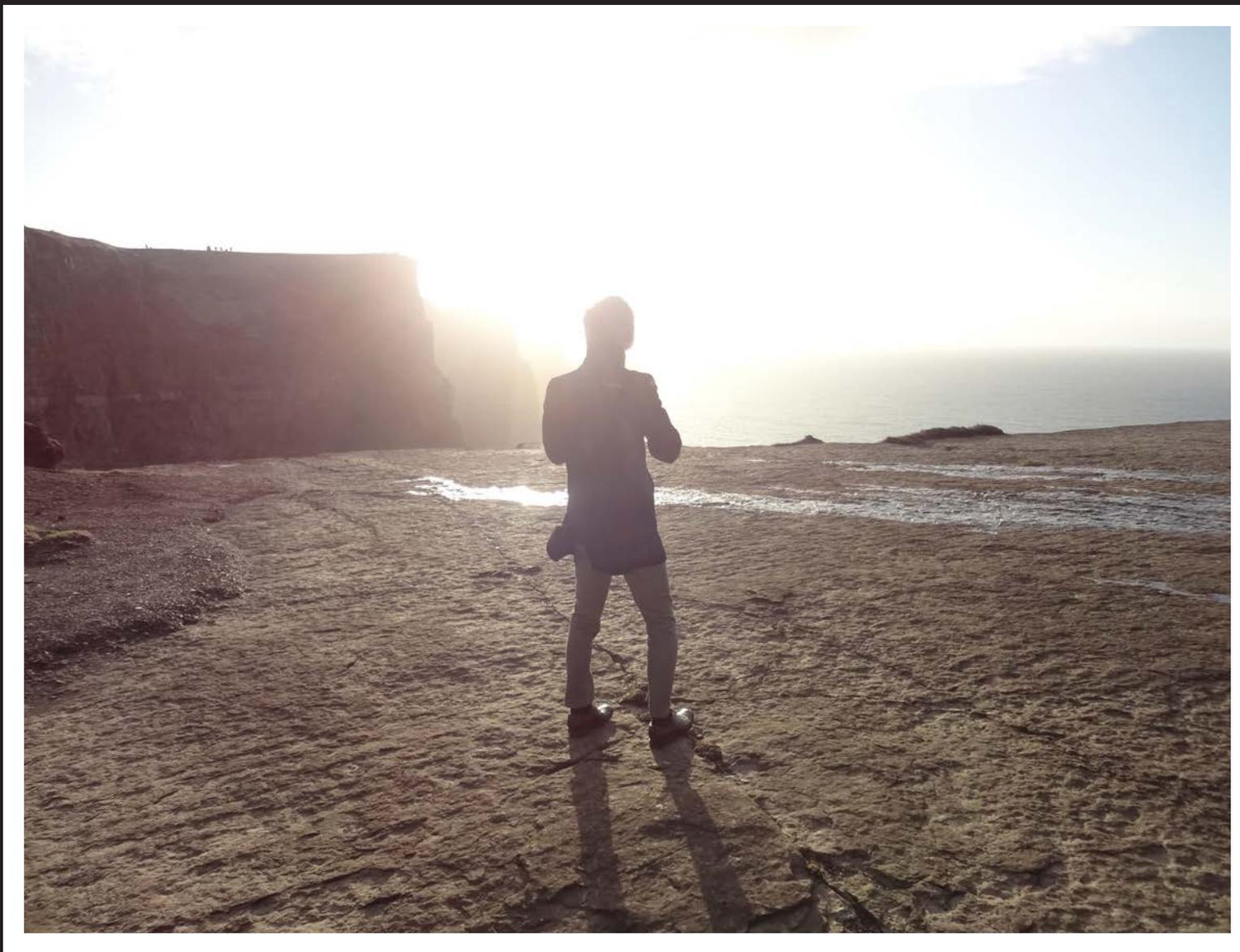
JSPS Londonからは、平松センター長による挨拶に続き、Watson International Programme Coordinatorが本会の概要、奥村 Research Administratorがフェローシップ事業に関して説明を行った。その

後、本センターの同窓会員である Jotus Hein 教授（University of Oxford）が、外国人特別研究員としての来日経験について講演を行った。

（奥村）



ワークショップで紹介された介護ロボット（提供：神戸大学）



国際協力員の1年は短い。期待、不安、様々な思いを抱えながらその間は後ろを振り返ることなく全力疾走する。それを走りきった者にしか見えない景色がある。加賀さん、松尾くん、一年間本当にお疲れ様でした。

このページでは、JSPS にて実施する国際交流事業やイベントなどを抜粋して紹介します。なお、詳細は各事業ウェブサイトをご覧ください。

## ◆ JSPS が募集する国際交流事業

### 外国人特別研究員（欧米短期）

欧米諸国の博士号取得前後の若手研究者に対し、我が国の大学等において指導を受け、共同研究に従事する機会を提供します。JSPS London が申請受付を行っていた 2012 年 11 月から 2013 年 3 月までの来日予定分は、2012 年 6 月 1 日が締め切りとなります。今後は英国のピアレビューによる書面審査を行い、10 月末までに採用候補者を決定する予定です。

また、JSPS 東京本部も同助成金の申請募集を年 6 回行っており、次回が今年度最後の申請受付となります。詳細は以下のとおりです。

受付期間：2012 年 7 月 30 日～

2012 年 8 月 3 日

来日時期：2012 年 12 月～

2013 年 3 月

支給額：

- ① 往復航空券
- ② 滞在費 362,000 円/月（事業開始時に博士の学位を有する者）、200,000 円/月（事業開始時に博士の学位を有しない者）
- ③ その他（海外旅行傷害保険、渡日一時金等）

申請方法：日本側受入研究者が JSPS 東京本部に申請

採用予定件数：年間計 60 名程度

→ 詳しくは [<こちら>](#)

### 頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

国際共同研究ネットワークの核となる優れた研究者の育成を目指すプログラムについて、平成 24 年度分の申請を JSPS 東京本部にて受け付けます。

受付期間：平成 24 年 7 月 9 日～ 11 日

※申請する大学によって、受付期間は異なります。

→ 詳しくは [<こちら>](#)

※日英交流事業の最新の公募情報は以下のページよりご覧いただけます。

<http://www.jspso.org/funding/index.html>

## ◆ JSPS London イベント情報

### <シンポジウム>

2012 年 6 月 25 日、26 日の 2 日間、日英シンポジウム Phase 2 開催スキームで採択された "Mitochondria- from the fundamental aspects to medical impor-

tance"（英国側コーディネータ University College London 安川武宏氏）が同大学にて開催されます。日本側からは、東京大学、筑波大学、大阪大学、九州大学でミトコンドリアの研究を行う研究者 5 名が講演する予定です。

→ 同シンポジウムの最新情報は [<こちら>](#)

### < JSPS 事業説明会 >

JSPS London では、定期的に英国内の大学等を訪問し、JSPS が実施する事業の紹介を行っています。今後の開催予定は以下のとおりです。最新情報は随時、当センターウェブサイトに掲載していきます。

・ 2012 年 6 月 19 日 Newcastle University

・ 2012 年 6 月 20 日 University of Glasgow

所属機関にて JSPS 事業説明会の開催をご希望の場合は、[enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org) までご連絡ください。



事業説明会（Leicester 大学にて）

## ◆ JSPS 各種情報を定期的にお届けします！

### JSPS London facebook ページ

facebook ユーザーの方には、公募情報や英国学術情報などウェブの更新情報をタイムリーにお届けします。

→  は [<こちら>](#)

### 在英日本人研究者 登録システム

JSPS London が開催するイベントの案内やニュースレターなどを、在英日本人研究者でご希望の方に送信しています。情報提供を希望される方は、上記 URL よりご登録ください。もしお知り合いで興味のある方がいらっしゃいましたら、本情報を転送いただけましたら幸いです。なお、対象となるのは、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）、及び在英日系企業研究所の研究者です。

→ 詳しくは [<こちら>](#)

### JSPS Monthly（学振便り）

JSPS の公募案内や活動報告などを、毎月第 1 月曜日にお届けするサービスです（購読無料）。情報提供を希望される方は、以下のリンクよりご登録ください。

→ 詳しくは [<こちら>](#)

（奥村）

## 編集を終えて

7月末から、ロンドンオリンピックが開催されます。今回のキーワードの1つに legacy があります。メイン会場は、元工業用地で土壌汚染により利用が難しくなっていた地域を再生し、閉幕後もどのように活用すべきか、過去に例がないほど詳細に検討してきた初めての大会であると、ボランティアガイドの方から伺い、深い感銘を覚えました。

今年度はニュースレターの発行時期が、5月、8月、11月、2月になります。英国では、mind the gap という言葉をよく耳にします。ギャップ（隙間）に注意してくださいとの意味です。ニュースレターでは、学術情報等の発信の使命を果たしつつ、英国に来てから感じるギャップ（相違）も大切にしてお届けしたいと思っています。Be important the gap という感じでしょうか。次号にもご期待ください。

(熊谷)

監 修： 平松 幸三  
 編集長： 齋藤 智  
 編集担当： 熊谷 純一



## JSPS London

**日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)**

14 Stephenson Way, London NW1 2HD United Kingdom

TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669

email: [enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org) Website: <http://www.jps.org/index.html>

